

- ⑳伊東：近世封建制度成立過程の一形態—紀州藩の合一(社会経済史研究 11-7-8)、小田井弘子：紀州藩の支配形態について(歴研 188) ㉑谷口澄夫：備前藩の知行制度(史学研究 62) ㉒山中寿夫：広島藩—浅野氏時代—の給知制度(史学研究 56) ㉓木村礎：萩藩在地家臣団について(史雑 62-8) ㉔藤野保：佐賀藩における知行地の存在形態(歴研 198) ㉕藤野：近世大名領の構造—肥前大村藩の場合—(史潮 53) ㉖東浅井郡志 卷3 p.61 ㉗幕府からの預り米5万石を加え知行35万石を公称することが許されたが、実際の提封は30石である。(この「預り米」については例えば近江蒲生郡志 卷4 p.288 参看)。 ㉘今寅年御家中分限帳(井伊家蔵) ㉙彦根藩租税記(彦根市立図書館蔵写本) ㉚北村寿四郎：彦根温古録 ㉛西岡・服部監修：日本歴史地図 ㉜井伊家蔵文書(寛政2年7月11日) ㉝御台所入正保二酉年七年ならしヲ以御家中並ニ新高ニ仕御目録(図書館蔵写本) ㉞御家中知行割の御書付(井伊家蔵) ㉟御知行所物成目録(中村林一氏蔵) ㊱借用申銀子之事(中村林一氏蔵) ㊲物成庭帳 21冊(図書館蔵) ㊳覚(井伊家蔵, 寛文11年10月25日) ㊴近藤忠：紀州の近世における地方行政区劃の変遷と村落の分合(人文地理 9-1) ㊵定(井伊家蔵, 正保2年7月11日) ㊶明和四丁亥年書上(彦根町史稿本 卷22 所収) ㊷覚 五十三ヶ条(図書館蔵写本) ㊸覚(同前, 寛文6年10月2日) ㊹覚(同前, 慶安5年12月23日) ㊺定諸給所方御仕置之事(図書館蔵) ㊻申年御用米諸村之覚(町史稿本 卷17 所収) ㊼東浅井郡志卷3 p.81~82) ㊽栗田元次：江戸時代(上)p.681 ㊾鈴木 寿：旗本領の構造(歴研 208) ㊿北村寿四郎：彦根史小話 ㊽相触候条々(町史稿本 卷22 所収) ㊾近江愛智郡志 卷2 p.268 ㊿指上申手形之事(中村林一氏蔵)

(京都大学大学院特別研究生)

西日本における民家の地理学的考察

— 屋根を中心として —

杉 本 尚 次

はじめに

民家の地理学的研究は、すでに内外諸先学によって集落地理研究の片隅に付加的に

取扱ったものから、集落構成要素としての民家自体を独自のテーマとして研究したものに至るまで数多くの業績をあげている。民家は地理学のみならず、建築学・民俗学・社会学など隣接諸科学からも各々の視点に立った考察がなされ、特に戦後における地方研究の進展は著しいものがある。また民家は変化する生活設計の一大要素でもあり、古い姿が失われつつある今日、早急な調査が望まれる。最近各地各分野研究者の協力、例えば民家研究会や地理学・民俗学・建築学などが共同で民家研究を推進すべきことが提唱されている。^①地理学としては、家屋自体を屋根・間取など各構成要素に分解し、^②各指標の自然との直接的関連や広義の生活様式（経済的・社会的側面）との関係、或は瓦葺や養蚕の盛衰など生活機能の変化によって形態が改良をうけ一地域型を形成するといったダイナミックな面にも注目し、類型の分布圏を正確に把握し、ついで各構成要素分布圏の重ね合せ（総合）などの操作を経て民家の地域的性格を抽出することによって、地域区分（人文領域・庶民文化圏）を行わんとするのである。^⑤

筆者は先にほぼ同様の方法で近畿地域についての報告や小地域の intensive な研究を行ったが、本報告では対象地域を拡大して西日本全域にわたり巨視的展望を試みた。なお、紙数の関係上、問題を屋根のみに限定して考察し、残余の間取・付属舎……総合としての地域区分の問題は別の機会に報告したい。

1 調査地域と調査方法

調査地域の西日本とは、若狭（福井県）・三重県を含む近畿地域と中国・四国・九州地域・沖縄・八重山諸島を含む周辺島嶼を包括した所謂日本列島の西南部全域である。対象は農山漁村の一般民家であり、都市住宅・寺社・公共建築物は除外した。調査村落としては、地域的に偏在した難点があるが、近畿地域 308、その他の西日本76、計 384 村落を有意抽出した。

調査方法は、民家形式の分布を数量的に把握すべく、近畿全域とその他の西日本の一部（山陰・中国山地・瀬戸内島嶼・隠岐島・屋久島）各村落における屋根型を中心に母屋全戸を調査した。なお、各構成要素（屋根型、材料など）分布の限界を探究すべく、交通線も可能な限り活用し、踏査が西日本全域にわたるよう注意した。かつ、総計3600地点にて写真撮影し、分類考察した。

また、民家調査項目を作成し、抽出村落において面接聞取調査を行い、更に経済生活その他の関連をも把握すべく、各種統計資料を活用した。調査地域が西日本とい

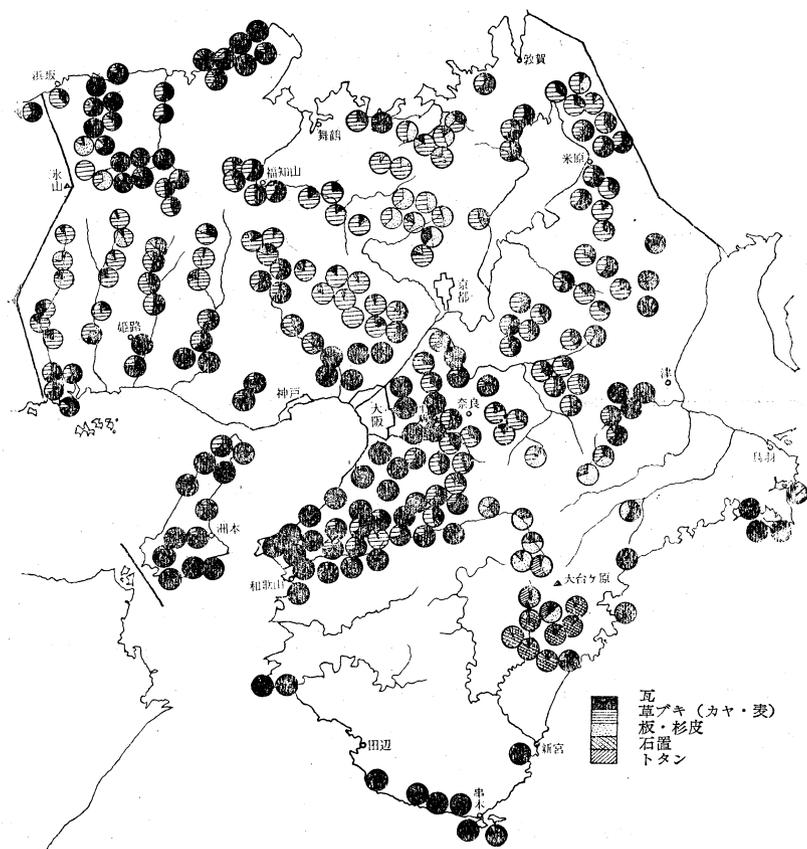
う広大な地域であり、未調査地域も多く、空白地域は隣接諸科学をも含めた諸先学の研究資料を数多く引用した。

調査は1953—1956年に実施したものが主体をなしている。

2 屋 根

民家の外観上最も注目されるのは屋根である。これを問題とする場合、屋根葺材料と屋根型が重要な構成要素となる。

(1) 屋根葺材料



第1図 屋根材料分布図（抽出村落別，近畿地域）

屋根葺材料としては草葺（茅，麦稈その他），板（杉皮などを含む），瓦，トタン，スレート（石）などが列挙される。

(a) **草葺屋根** 近畿に於ては中央構造線以北に，中国地方では中国山地，四国では四国山脈以北，九州では九州山地を中心として九州全般に分布し，平野地域，特に大都市及びその近郊と海岸地域，島嶼部（南西諸島を除く）では減少し，瓦葺又は板葺の卓越地域となっている。草葺（特に茅）は，日本民家の基本的材料であり，素材の得易さと共に防寒防暑的であり，過去に於ては茅が最も普遍的に用いられたと考えられる。これは多くの場合，共同の茅場が各部落に存在した事からも明かであるが，明治以降共有林の分割，私有化や開墾植林などの進展の結果，減少の一途をたどっている。今，葺茅の分布をみれば，紀和山地北部や大和高原，中国山地とその延長たる但馬山間部，丹波高原，四国山地の祖谷をはじめとする吉野川上流地域の山間村，九州山地（高千穂，椎葉，五家荘地域），奄美大島などが典型的であり，共有山や屋根葺講などの葺換作業を中心とする諸慣習も根強く保存されている場合が多い。即ち材料が容易に豊富に得られる奥まった山間部や山深い離島に顕著に残存している。一方平野部では階層的に上層を占める旧家などで茅が用いられる程度にすぎない。茅の減少は当然他の材料への変化を促すが，草葺を継続して麦稈葺に変化する地域と瓦葺化する地域とがある。即ち現在大部分の草葺屋根は麦稈（小麦稈）が代用或は混入され，特に麦の生産と関連深い二毛作地域（西日本諸平野），畑作地域（九州南部・南四国・紀伊半島南部など）では顕著である。草葺では茅，麦稈の他に，麻稈，笹を混入する所もあり，トカラ列島では寒山竹を用い，喜界島・沖永良部島・与論島など山地の少い離島では一部に砂糖黍の搾殻を使用しており，甘蔗栽培を主とする当地域の生活の一端が窺える。

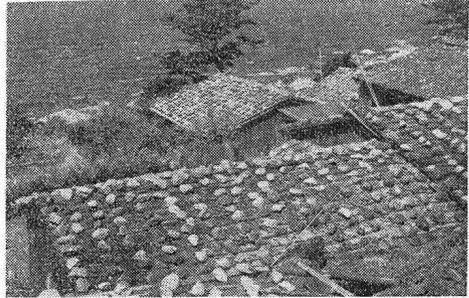
しかし草葺は火災や風の問題，最近では原料不足と高価，加うるに「カヤ1代，ワラ10年」と云われるように，麦稈の場合，特に耐久力は短く，屋根葺換えの手間や賃金の問題など多くの欠点から，経済的余力のある階層や，戦後のインフレ，豊作など好景気を背景として，瓦，トタンなど文化的材料が著しく増加し，地域的には山間部から平野・海岸・都市地域に至るほど草葺の減少が激しい。

(b) **板葺（杉皮を含む）と石置屋根** 板葺は純粋の板葺（そいだ木片を張った葺葺，杉葺と杉皮葺など）と押えのある板葺（石置屋根）の2タイプに分類される。板

葺は熊野川上流から紀ノ川上流域に至る紀和山地・丹波高原・中国山地・吉野川上流から剣山周辺に至る四国山地・高千穂から椎葉・五家荘に至る九州山地・離島の隠岐島後・屋久島などに主要分布を示し、中国山地では栗材をそいだ粉葺が、他では杉皮葺と、杉材をそいだ葺葺が卓越している。

板葺も日本民家の古い形式で、江戸初期には町屋に用いられ、かつては平野地域でも用いられたが、現在では隔絶的山間部と島嶼を中心に分布する。これら板葺卓越地域は、耕地極小、林産に依存する土地、或は離島（特に屋久島）といった貧困経済地域であり、素材の得易さと共に重要な因子と考えられる。

石置屋根は板葺の押えである石を並べたもので、熊野灘沿岸から熊野川中流域・中国山地三瓶山周辺の山村・隠岐島後の山間部・五島列島・屋久島などに石に富む溪谷や(谷風)、島嶼に多く分布する。石は円礫より角礫が多く用いられ、特に屋久島では全戸の60—70%は石置屋根で、3寸勾配の傾斜面に杉平木で葺き、竹をのせ、石を屋根一面に並べて押えた典型的なものである。全国

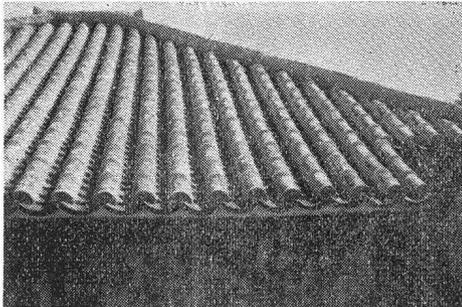


第2図 杉平木葺・石置屋根
(屋久島吉田部落)

的には北海道南西部海岸・下北半島東岸・三陸海岸・佐渡島・日本海岸羽越沿線・直江津付近・上越沿線・八ヶ岳周辺・木曾谷など、谷風及至は風雪の強い地域に多くみられるようである。板葺は平均10—15年、多雨な屋久島などでは8年程度で耐久性は弱く、紀和山地・奄美群島（特に沖永良部・与論島）などでは近年トタンが導入されつつある。トタンは安価で耐久力があり、軽量で輸送至便であり、農村や密集郊外地など瓦葺にまで変える余力なき階層に利用される傾向が強い。また奄美群島の場合、^⑧天水利用の面から集水に至便なトタンが導入されたことも見逃せない。

(c) 瓦葺 瓦葺は都市及び都市的色彩の強い近郊平野・海岸地域と瓦生産地帯に分布が顕著である。瓦は維新後一般に普及し、^⑨都市の傾向大なる地域は、経済力と交通至便な点に於て、高価だが不燃性で耐久力に富み外観にも優れた瓦を採用したのである。和泉平野・淡路島・播磨平野・石見海岸部・讃岐平野・佐賀平野などの瓦葺卓

越地域は瓦生産地であり、原料(陶土)産地を中心として交通の発達に従って分布している。中でも和泉平野や淡路島は良質の粘土^⑩や河川、山地よりの燃料の供給と相俟って古くよりの瓦生産地であり、本瓦葺の最大分布地域、ないし西日本における瓦葺の代表的地域をなしている。海岸地帯では集落密集し、風などの自然的制約から瓦葺化は進行し、特に外洋(太平洋)に面する紀伊半島沿岸や四国南部・九州西南部・南西諸島の沿岸漁村農村では、大部分「白漆喰」を施し、棟瓦を針金でとめ、或は台風時に安価な古い漁網(瓦押えに充分使えるもの12坪余の農家で300円程度：甕島^⑪)やシユロ縄で覆う所もあり、この方法は、かなり低い階層にも行える手段であることを示している。これらの耐風設備は草葺にも網を用いたり、斜面を割竹で補強するなど



第3図 中国風の赤瓦屋根(白漆喰で固める)(与論島茶花)

各種の方法が講ぜられ、これらは岬端部や台風通過地域に当る島嶼ほど著しく、外洋暴風地域の共通性を示している。

沖縄では、反りをもつ中国風の美しい本葺赤瓦屋根が特徴的で、^{⑫⑬}白漆喰を厚くぬり固めて重量感に富んだ様相を呈している。このタイプは沖縄本島を中心に与論・沖

永良部・徳之島にまで分布しており、大陸文化の影響と共に耐風構造の面で南西諸島の風土に適した形態であると思われる。山陰海岸から若狭にかけての日本海側斜面から湖北に至る地域では、雪に対する施設が顕著である。まず「雪止め瓦」或は「丸太式雪止め」(屋根に軒と並行に丸太をおき、鈎金針でとめる)^⑭があげられる。これは雪の一時に迂り落ち、ひさしの破損を防ぐものであり、分布は北海道(主に西部)や東北・北陸の深雪地を主体とし、若狭・湖北・但馬・隠岐島・山陰海岸では西方に行くほど減少し、湖東平野・口丹波小野郷など表日本にまでみられ、特に積雪量の多い但馬山間部や湖北などでは2-3列にも雪止め瓦を施している。なお、丸太式雪止めは分布縁辺部や経済的に余裕なき民家に多く採用されるようである。

山陰海岸では艶のある「石見の赤瓦」が景観に一大特色を与えている。これは宍道湖岸来待産の黒来待石粉や温泉津の金生粉を溶いた粘薬を用いた飴色瓦で、素焼瓦の

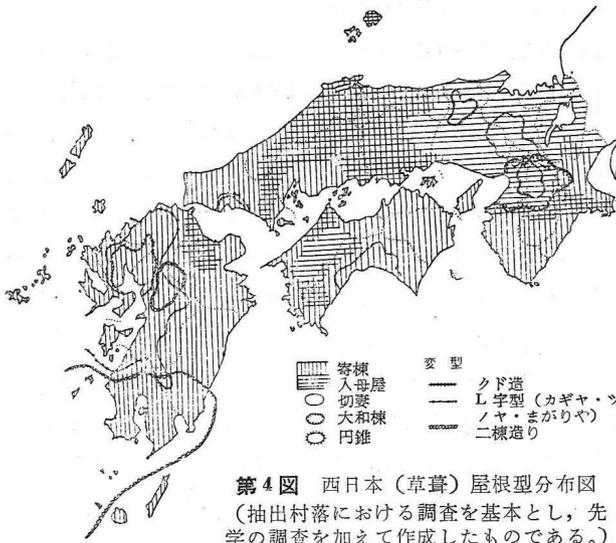
如く水分を吸収せず、山陰地域では冬季季節風に加えて凍雪破損を防ぐ利点を持っており、山陰地域に適したものと考えられる。詳細に石見赤瓦の分布をみれば、生産中心地である島根県那賀郡温泉津—都濃津間の海岸地域に90%(赤瓦戸数/全瓦葺戸数)以上の卓越地域を示し、¹⁵ 県下の海岸部を中心に隠岐島(70—80%)・山口県・鳥取県へ延び、西条盆地・津山盆地など広島・岡山県北部、西へは対馬・宍岐、東では河川沿いに但馬山間部から市川上流・丹後半島に至り、北四国・北九州にも分布し、分布周辺部では棟瓦や付属舎に用いられている。かくの如く分布地域はかなり広範囲にわたるが、山陰とほぼ類似した性格を有する地域に採用されていることが指摘されるのである。販路は島根県の農山漁村を第1に鳥取・山口・兵庫・岡山・広島と隣接地域¹⁶に多く、福岡・佐賀・長崎県にも出荷されており、山陰線開通前は船舶によって出荷され、沿岸はもとより、隠岐・対馬・宍岐にも供給したわけである。開通後は以前の販路を踏襲しつつ、山口・伯備・因美線など中国横断鉄道の完成によって内部へも分布を拡大したと考えられ、赤瓦の分布は自然的条件のみでなく、交通との関連や経済上の理由も見逃せぬものである。

山間部では一般に草葺、板葺の分布領域であるが、円山川上流山間部は例外的瓦葺卓越地帯である。この地域の村落は円山川河岸段丘上、山陰道に沿った街村で、土壁塗込式卯立の構造もみられ、火災を考慮した点も考えられるが、当地域は西日本随一の養蚕地帯(昭和25年センサス養父郡の養蚕率58%、西日本郡別の最高率を示す)であり、明治初年まで一般に草葺であったものが、養蚕の盛行によって改造(後述)され、経済的余裕と相俟って瓦が普及したものであろう。

(d) 石葺 石葺はわが国では例が少いが、利用されるものは粘板岩、または板状節理を持つ火成岩で、西日本では対馬にみられる。しかし多くの場合小屋に使用され、厚い頁岩質の粘板岩を約2.5尺—3尺角に切り、瓦の如く重ねており、その重量感¹⁷は俗謡にまで歌われている。

(2) 屋根型(草葺)

屋根の形態的な分類は、寄棟・入母屋・切妻に三大別されるが、西日本ではこれら基本型の他に、切妻から発達せる大和棟・寄棟と関連深い円錐屋根・変形或は組合せとしてのU、L字型屋根(寄棟、入母屋)・片入母屋・二棟など種々のタイプが分布している。

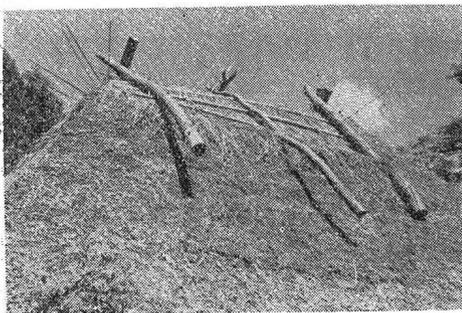


第4図 西日本(草葺)屋根型分布図
(抽出村落における調査を基本とし、先学の調査を加えて作成したものである。)

(a) 寄棟 寄棟は破風の無い4つの傾斜面からなる屋根で、全国的分布を示す型である。

西日本では、伊勢平野から一部湖東平野中南部・伊賀盆地・大和高原・東部・中央構造線以南の紀伊半島・四国・九州の大部分・淡路島・南西

諸島・中国地方と広範囲に分布し、湖東平野・大和高原・山口県東部・島根県中東部



第5図 高千穂の寄棟と棟飾り(ウマノリ)
(宮崎県西臼杵郡高千穂町三田井)

・鳥取県と広島・岡山県北部・瀬戸内島嶼では入母屋などと混在し、漸移地域を形成している。寄棟でも伊勢・伊賀・大和高原の型、中国地方の整った寄棟、北四国・淡路島のずんぐりした型、北九州唐津から佐賀県東富久・呼子半島にかけて分布する沓岐と同系統の急斜面の寄棟、鹿児島・宮崎県南部

から南西諸島に分布する棟部分の縮少した方形に近い型など諸タイプが地域的に分布し、これに瓦箱棟や諸種の棟飾りが加って多様さを増すのである。また大和高原の場合、その中南部で寄棟と共に大和棟系統の型が30%内外分布するが、これは旧藩の關係から同一藩領であった伊賀の民家形式を導入したものが、藩落以後、行政的に大和平野郡と同一郡に属し、交通の至便化と共に、民家形式も新しいものは隣接地のタイ

①⑨
 プを模倣し、多少変形しつつも大和棟に属する型を分布せしめたものと考えられ、社会環境の変化による型の変容として注目される。同様の事例は南部の曲屋、北九州のクド造りなどについても考えられるが詳調査の必要がある。寄棟は四方に斜面をもつ屋根であり、二面にのみ斜面をもつ切妻や破風をもつ入母屋に比してより耐風的と考えられ、前記の南九州から南西諸島に分布する方形に近い寄棟や沖永良部・与論島の円錐屋根（後述）など、台風通過時のような風向の変化する場合には有利であり、また分布が東海・紀伊半島・四国・中国西部・九州など太平洋沿岸地域に顕著であること、入母屋が近畿（中央構造線以北）・中国東部・北西四国（愛媛）・富士東麓・関東山地・北上川中流域など内陸部を中心に分布することから、寄棟が入母屋に比し耐風的とも考えられるのである。なお寄棟の力学的構造については今後の調査が期待される。

(b) 入母屋 入母屋は最も複雑で技巧的な構成を示し、かつては一般に使用を禁じられた型であり、寄棟より新しいものと思われる。分布は山城・河内・和泉・丹波・丹後・但馬・若狭・近江北半・甲賀山地など近畿中部～北部に95%以上の卓越地域をみせ、西に延びて岡山・広島県北部・山口県東部から島根県中東部に寄棟と混在しつつ分布圏を拡大し、四国では愛媛県大洲盆地を中心に石槌山北部から久万町・東宇和郡・温泉郡山間部、更に隣接の吉野川上流本川村（高知県）にかけて拡がり、九州では福岡県東部瀬戸内沿岸苅田付近から中津・英彦山山麓地帯・国東半島南部に寄棟と混在している。島嶼では隠岐島と瀬戸内中東部島嶼（広島湾一芸予叢島）に僅少分布がみられる。全国的には前述の如く寄棟に比し内陸側に分布する傾向が強い。また入母屋でも破風に丸竹を交叉したものが山城・大和・河内平野に、丹波から若狭・山陰にかけて板張りが多く、定紋を彫り、福知山盆地や南桑田郡にみる如く白壁にする所もあり、丹波胡麻郷から福知山盆地にかけ破風極大であり、民芸品の趣きをみせる。四国の入母屋も破風は大であるが、近畿でも播磨・湖東など周辺部や九州・中国地方に分布するものなど破風は縮小し、寄棟に近い型を示す。出雲簸川平野・島根半島・木次付近一帯に分布する棟を優美にそりあげたもの、また福知山盆地を中心に但馬山川流域にみられる入母屋切落屋根、棟の空気抜など養蚕時の採光、通風といった経済生活の影響による型もあり、更に前述の丹波の極大破風も藤田博士が日本民家史の中で指摘された家格の表現によるものとも考えられるが、福知山盆地・但馬山間部でも大正中期―昭和初期に養蚕のため屋根裏を使用した実例があり（破風→明りと

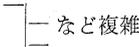
り、通風窓)、家格や修業を積んだ各地の屋根職人の技術などと共に一要因をなすものと考えられる。このように入母屋自身、破風の大小などによって地域的に差異が認められるのである。また断続的に入母屋(寄棟圈の中に鳥状に)や寄棟が一部落或は二・三戸と分布がみられるが、これは模倣などが主たる理由であり、稀に未解放部落といった場合もある(武庫平野)。

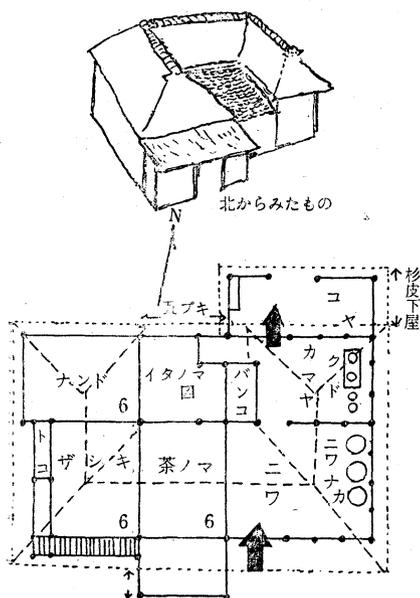
(c) 切妻 切妻は屋根の妻側を垂直に切りとった形で、瓦葺には多く用いられる型であるが、草葺では大和盆地と但馬山間部に核心的分布地域をもち、全国的には、飛騨地方・甲府盆地・米沢盆地などにみられ、入母屋や寄棟に比し分布地域は狭小である。但馬山間部(養父郡・出石郡)の切妻はこの地の金山古図(兵庫県養父郡関宮村字吉井部落所蔵:延享2年3月と元禄7年戌4月の2枚)によれば、葺おろしの入母屋が画かれ、現在も入母屋の混在が認められる関係上、古くは入母屋であったものが、大正初期からの養蚕盛況に伴い、2—3階建に改造し(但馬円山川流域抽出村落で2階は全家屋の91%、2階屋のうち23%が3階建)多くは密集した中で最大の容積を占め得る切妻を採用して妻側に明り窓をつけている。切妻は養蚕用として進歩した型であり、本地域の経済生活と密接に結合したものと云えるのである。大和盆地を分布地域とするものは、大和棟発達過程の原初的なものと考えられ、接続した摂河平野及び大和高原に及んでいる。

(d) 大和棟 大和棟は、草葺切妻の母屋を中心として左右に落棟をもち、妻側を塗り固め(防火壁)、その上を瓦葺とした(高塀と呼ぶ)型で、〔A〕切妻両面の防火壁が棟より低く、上部の瓦が小規模なもの<ひずみ高塀>、〔B〕切妻両面の防火壁、瓦葺が発達し棟と同等或は高くなったもの<たかへ>、棟が杉皮針目覆を載せるもの、〔C〕B型の棟が瓦葺箱棟となったもの、と発達系列に従って3形式に分類できる。²²⁾ この様な家屋構造は、閉鎖式建物配置と共に直感的に大陸の影響を思わせるが、〔I〕大和盆地は典型的な集落密集形態をとっており、妻を塗り込め、京阪の町屋にみられる卯立と同性格の高塀(防火壁)を有するようになり、永年の火災による苦しい生活経験の構成とみられる点が多分にあり、また東西棟が最も多く〔大和盆地中央部旧二階堂村で72戸中66戸91%東西棟〕、釜屋部分を塗り込めにし、この部分を落棟瓦葺にし、主に冬季卓越風(西風)の風下側即ち母屋の東側に配している〔二階堂村で72戸中59戸82%釜屋東側〕。²³⁾ 要するに大和盆地の地域的特性から生じた形式であることが

指摘される。〔Ⅱ〕更に大和棟の分布をみれば、盆地中央部に於て75%以上の高率を示すが、総戸数に対する割合は30%前後であり、特にB・C型といった Typical な型²⁴は、いずれも富農層の家に多い。これは白木小三郎氏によれば「徳川中期以降、封建社会が安定してくるに伴い、村方の身分制の再編成も行われ、庄屋や組頭など家格が出来、貢祖その他煩雑な諸用が農耕の上に加ってくるので、家族構成が膨脹し、複雑化する。従ってこれらの村方役人は一般農家に禁じられていた武家的な座敷の拡張及び長屋門の建築も許され、座敷部分も落棟となって後補される」。即ち村方の階層分化の過程において形成され、家格の表現形式として富農層に採用されたものが今に継承されたものと考えられるのであり、前記の集落形式や大和盆地の地域性による生活経験的の形成過程と共に重要因子であり、日本民家として勿論大陸の影響を受容しつつも大和盆地特有の地理的歴史的の条件を反映した構造であり、大陸文化の影響のみで理解することは不可能である。

大和棟は大和盆地を中核として、大和川・木津川通谷の各交通線に沿って隣接する山城・摂河泉平野・大和高原にまで分布し、分布核心地域では発達したB・C型の分布が密であるが、周辺部ほどA型が卓越し、山城南部・淀川溢路にかけて片入母屋大和棟に変形し、大和高原では妻壁上部の瓦が縮小した型など諸変型が混在し、分布縁部に漸移型(変型)を示している。更にこれらの地域に於て、大和棟は前記のように、北河内の幣原邸・重要文化財吉村邸・古市の森田家などにみられるように家格表現形式の多いことを示している。また武庫川右岸や和泉山地・紀ノ川谷など分布限界のものは模倣採用した例が数多くみられるのである。

(e) 変型：L字U字型屋根 クド造りと称するU字型屋根・鍵屋・つやと呼ばれるL字型屋根などは、基本型からの変型である。クド造りは、本棟が寄棟でUの形に所謂クドの形をなし、その中央谷の部分に瓦葺屋根が片流れに葺かれた型が典型である。この他蔵田周忠氏によれば4形式が指摘され、更に棟の平面が  など複雑を極め、正方形をなすものもある(木下良氏報)。しかし間取は日本民家に普遍的な4間取或は同系のものが多い。分布は筑紫平野佐賀市付近を核心とし、東は鳥栖・久留米から西は東多久・武雄にかけて典型的であり、鹿島・湯江(長崎本線)・伊万里付近・背振山塊南部・二日市、東では鹿児島本線沿いに大牟田付近までがほぼクド造りの分布圏である。また断続しているが、瀬戸内海西部防府平野四辻―三田尻間にも



第6図 クド造りの Typical なもの
(屋根と間取)
<福岡県柳川市両開>

この特色ある型を奨励したとの説もあるが、今後の古文書類の探査が望まれる。これを要するに、クド造りについては、卓越風・二毛作地域(屋根材料)といった筑紫平野の地域性との関連が考えられるが、構造様式の伝播、旧藩の政策もみのがせず、今後多くの問題を山積している。このU屋根と同系と目される谷の瓦葺の部分に欠き、両棟が中央で接して、そこに水平の樋を入れた型が熊本県北部(菊池郡西合志村付近)にみられ、更にUを改造してL字型とした例もあり²⁶⁾、かつては分布圏が現在より広範囲に及んだと推察される。

L字型鍵屋は、クド造り分布圏内にも混在するが、拡大して北は玄海灘沿岸赤間付近、南は熊本県北部菊池・玉名・鹿本郡から南部の球磨川に沿い、人吉盆地、更に宮崎県児湯郡地方にも延び、大分県英彦山周辺や鹿児島県下にも散在し、分布縁部では、麓集落の武家屋敷や旧家などに用いられる傾向がある。天草では上島の西岸にL字型の小屋が分布している。鍵屋は、中国地方では前記防府付近にみられ、四国では

同様のタイプが分布している。クド造りについては、直感的に朝鮮民家との関連のみを説く学者もあり、分布が北九州と瀬戸内西部にあることから一考の要はあるが²⁶⁾確認はない。聞き取りその他によれば、「強風に備えるため」との回答が多く、家屋が多くの場合U字型の谷の部分に北にし、両翼が風に対する支柱の役を果すものと考えられる(卓越風は西南風)、また分布地域が平野部を主としており薬材の豊富な点があげられる。これと関連的に木材不足による点もあるが、最近の調査で大形木材を用いる例が明らかにされ、この点は薄らいた感がある。更に旧藩時代鍋島公が物資節約と耐風工作のため

「まがりや」と称し、高知平野に散在的に分布し、郷土住宅などにこの型が多い。丹波高原を中心に分布するL字型は入母屋本棟からつき出したもので、「つのや」「中門建て」と称し、藤田博士も指摘される如く旧家に採用されており、四国の場合と同様家格表現形式と云えるのである。

(f) 二棟造 二棟造りは、居住部分の母屋と炊事場の釜屋が別棟となった形式で、〔A〕二棟が全く分離したもの、〔B〕相接して樋で連結したもの(平面的には板の間)に分類する。〔A〕型は、本土では鹿児島県薩摩・大隅半島から宮崎県南部(北及び西諸県郡)に分布し、甕島、南下して口永良部・トカラ列島・奄美群島・沖縄・八重山諸島にまで及び、屋久・種子両島では分布をみない。〔B〕型は沖縄本島・鹿児島県(本土)南部に僅少混在し、本土では郷土住宅(麓)にこの形式が多い。全国的には三宅島以南の伊豆諸島・小笠原諸島にもみられ、南洋群島では一般のタイプ⁽³⁰⁾となっており、南島系のもと考えられる。以上が二棟造の主要分布地域であるが、長崎県西海岸・高知県全域・徳島県勝浦・那賀郡にも同形式のものが僅小分布⁽³¹⁾、本州でも東北に別棟炊事屋、福井県～佐渡にもこの型がかって存在したといわれ、相当北まで分布圏を拡大していたと推される。さらに別棟のカマヤが母屋内に入る一般型への漸移型(B型もこの段階か)として母屋に下屋をかけて釜屋としたものがある。これは南九州は勿論、四国・瀬戸内をはじめ、関東西部以西の表日本に広範に分布している。

以上のように、1棟の下で室を増加させず別棟として増設する形式は、南方民族の伝統的手法であり、別の機能をもつ各棟が接近結合して家を形成したとする柳田説⁽³²⁾を暗示する例でもある。また住居部分が土間を欠く点、高床式との関連も考えられる。二棟造りが南島や九州南部を中心に分布することは、一つには暖地に於て炊事場を分離し、室内に暑気を導かぬよう考慮されたものと思われ、更に台風圏内という地理的位置に加うるに、屋久島の如き木材資源豊富な島は少く、木材不足地域であり、



第7図 二つ家〔寄棟・L(居住)、入母屋の部分(土間・カマヤ)〕
(熊本市北郊黒石村黒石)

技術の後進的であり、経済的にも恵まれぬ土地であるため台風被害防止には多数の部屋を一棟に集合して大屋根を造るよりも、不便ではあるが、別棟にして分散させる方が良く、本地域の性格に合致したタイプとみられ、分布が日本列島を北上するに従って漸次変容したものと推察されるのである。尚、熊本県北部（菊池郡迫間村・黒石村・鹿本郡岳間村）には二棟相接した（B型）「二つ家」と称する類型が分布し、南島系の二棟造との関連が考えられるが、黒石村の場合、細川藩の開拓村として土族土着の際建築した例もあり、二つ家の一方がL又はU字型をなすものもあってタド造りとの関係をも考えさせる。

(g) 円錐屋根 円錐形の草屋根は本邦最南端与論島と沖永良部島に分布し、与論



第8図 円錐屋根と珊瑚石灰岩の石垣
(与論島茶花)

島では母屋及び付属舎（砂糖搾り小屋など）、沖永良部島では付属舎のみに用いられる。母屋に用いられたのは戦後で、かつては寄棟であり（現今与論島で寄棟は2～3戸）、小屋には古くから用いられていたのである。人手不足や台風毎の補強の必要から少人数で葺ける円錐屋根を母屋に採用したのであろう。更に先述の寄棟と同様、

風向の変化する場合には最も有利な構造と考えられ、斜面上部は竹の輪、がじゆまるの根を鉢巻状にして飛散を防ぎ、がじゆまる、福木などの厚い防風林の存在と共に台風地域と貧困経済の離島に発生した特色ある屋根型と云えるのである。

3. 一つのむすび

以上屋根を中心とした考察をなしたが、(1)屋根材料の場合、隔絶の山間村や島嶼ほど茅、板など自然の提供した素材を活用し、瓦は生産地と結合するほか、都市化や交通機関の発達と共に都市近郊→山間地域へ浸潤しつつあり、この傾向は今後一層促進される。また瓦葺自身も裏日本の積雪地域と「雪止め瓦」「石州赤瓦」海岸部（特に太平洋沿岸）の諸防風設備など各々地域性を反映すること、また沖縄の中国風赤瓦屋根など文化系統を推察させる。屋根材料については、経済的背景が強く働く点も軽視出

来ぬ面である。

(2)屋根型は寄棟、入母屋を主としつつも全タイプが分布し、棟飾りが加って様々の特色を示すが、その分布が地域的にあつげられること、地形区とほぼ一致する点が多いことが注目される。特に複雑な分布を示す近畿中央部の場合、大和・伊賀などの断層盆地や地壘山地の交叉する複雑な地形など多くの地理的単元を有することを物語り、古くからの文化中心で多くの要素が加つたものとも考えられる。また各分布地域（庶民文化圏）の周辺部に両文化様式の交錯した、或は型自体が変容しつつある漸移地域がみられ、海路や河谷（通谷）・峠など主に交通路を通してタイプが伝播したことを示し、更に社会環境の変化による型の変容、自然に対する諸適応を示すもの、養蚕など経済生活の変化過程に於て形成されたタイプなど、各地域の特性を反映する点が指摘されるのである。

<後記>本報告は広大な地域を取扱っており、未調査地域や不備の点が多い。また屋根は古くからの伝統・建築技術や模倣・美観保持など歴史的・民俗学的・社会心理的な面も強く働く。諸先学よりの御高教を乞ひ今後研究の充実を期する計画である。最後に本研究に対し御指導賜わつた村松教授はじめ各界にわたる諸先生、調査に協力下さつた多くの友人や現地の人々に対し深謝の意を表します。

〔註〕 ①石原憲治：民俗建築学の方法について、民俗建築15—16合併。昭30。

②構成要素に分解して考察する方法は K. Ehemannも近年の研究で実施しているが、F. Huttenlocher の如く分解せずその全体に於て取上げるべきこと（民家は集落の細胞、経済単位）を強調する学者もあり、多面的研究法の必要を感じる。K. Ehemann : Das Bauernhaus in der Wetterau und SW-Vogelsberg. Forschungen zur Deutschen Landeskunde. 61. Remagen. 1953, F. Huttenlocher : Siedlungsgeographie und Siedlungskunde biologisch betrachtet. Geogr. Rundschau. 1951.

③拙稿：近畿の屋根型。日本民俗学2の3。昭30。④拙稿：近畿の間取型。日本民俗学4の2。昭32。⑤拙稿：先志摩の漁村住宅。農村建築33。昭31。⑥多くの実例があるが紙数の関係上省略する。⑦藤田元春：日本民家史 p.81—90。⑧扇田信：奄美大島沖永良部島の農家。農村建築38。昭32。⑨藤田元春：前掲書。⑩和泉平野の陶土は洪積層大阪層群に属し、瀬戸よりおとるが生成の時期は同じ。⑪扇田信：甕島の農漁村住宅。農村建築29。昭30。⑫辻村太郎、田辺健一：沖縄

本島の家屋。地理学 8 の 1 昭 15。⑬富田芳郎：沖繩諸島の地理学的特質。地理学 7 昭14。⑭鳥之夫：日本民屋地理。p.141—154。⑮戦前の赤瓦生産工場数統計では那賀郡（県下の50%）。戦後他の瓦をも含めた粘土瓦としての統計がある(38%)。森信美：石見の赤瓦及粗陶器の地理的研究。地理学 4 の 4 昭11。⑯都濃津地区瓦出荷組合。県庁統計課聞取り。組合別出荷の関係上統一資料なし。⑰石原憲治：対馬の民家。九学会連合対馬調査報告書。昭30。⑱蔵田周忠：民家帖。p.264—266。昭30。⑲村松繁樹：都介野村の集落（形態と機能）。奈良県総合文化調査報告書。昭27。及び調査カード。⑳小倉強：東北の民家 p.206—211。昭 30。㉑小倉強：前掲書。この地域の調査。河野正直：但馬における居住景観の地理的考察。地学雑誌 昭10，拙稿：兵庫県の民家—地理的考察—兵庫史学 8。昭 31。㉒大和棟，入母屋などを中心とした写真集，藤田元春編：近畿の民家（アサヒ写真ブック）写真，早瀬哲恒，杉本尚次ほか。㉓村松繁樹：所謂環濠集落について。人文研究 1 の12 昭 26。㉔白木小三郎：所謂「大和棟民家について」—それが形成される1過程—日本建築学会研究報告 18 昭27。㉕㉖㉗蔵田周忠：前掲書 p.273。鳥真一：民家（佐賀市近郊）。新郷土 11 昭29。ほか同氏の11報告。㉘石原憲治：北九州の二つの家について。民俗建築 3 昭 26。㉙野村孝文：南九州民家の概観。農村建築 20 昭28，薩藩郷土住宅の特性。日本建築学会研究報告 24 昭28。㉚石原憲治：日本農民建築第1輯。昭9。㉛佐藤甚次郎：日本の間取りの分布。現代地理講座 4 昭 31。㉜蔵田周忠：前掲書。二棟造りに関する文献，野村孝文：鹿児島県における母屋，釜屋を別棟にする住居形式について。日本建築学会研究報告。昭 26。ほか 2 論文及び国分直一・重久十郎：薩摩半島東岸の民家。薩南民俗 4 昭 29，石原憲治：九州民家の構造。日本建築学会研究報告 18 昭27。㉝野村孝文：与論島の民家。日本建築学会論文集 54 昭31。㉞三島庄一：奄美大島の住宅与論島。農村建築 30 昭30。

（大阪市立大学大学院学生）

were shared equally by all vassals. Besides, it had an effect of preventing a vassal to become overpowerful in his estate.

A Geographical Study of Rural Houses in Western Japan : Their Roofs

by Hisatsugu SUGIMOTO

i) In terms of geography, the rural house, especially its roof, is an important key to approach a settlement structure. The roof of a rural house differs from one area to another, as it reflects conditions as well as the specific way of living of the people of an area. It is possible to grasp the typical regional character in the type of roof and arrangement of rooms ; also, the dynamic change of life in a rural area, such as pervasion of the use of roof-tiles and the rise and fall of silkworm culture, can be made clear through the roof-type and its change.

The present writer chooses the whole Western Japan an object, examines the distribution of several roof-types, and courses of their circulation, and tries to make clear settlement structures as seen through the roofs.

ii) Roofing material :

More isolated mountain or island villages use more thatched or shingle-roofs. Tiled roofs are widely used in industrialized areas ; they show the tendency to spread from suburban areas into mountain areas with the development of urbanization and traffic. This tendency will grow stronger in future.

Different roof-tiles are used between each area, reflecting local conditions: the tile-guard and the Iwami red tile in the snowy area of the northern parts (although not so wide spread as in the Tohoku and Hokuriku Districts) ; windbreaks in the seacoast area (especially in the Pacific Coast). Chinese red tiles in Okinawa are interesting as showing foreign influences.

To a large extent, roofing material is conditioned by economic backgrounds.

iii) Roof-types :

Many types can be recognized : the U. and L. roofs, the conical roof

and other varieties beside three fundamental types—the “irimoya” (gabled) roof, the “yosemune” (hipped) roof, the “kirizuma” (barge) roof.

The “irimoya” roof is spread over the Kinki District north of the median dislocation line, eastern Chugoku, north-western Shikoku.

The “yosemune” roof is widely adopted in the Kii Peninsular, western Chugoku, the Shikoku District, and the Kyushu District. It is especially much used along the Pacific Coast.

The “kirizuma” roof is popular in the mountain areas of Tajima, Hyogo Pref., and the Yamato Basin. In Tajima, silkworm culture accounts for its popularity. In Yamato, the “kirizuma” style has developed into the so-called “yamatomune” roof.

The U. type roof, a variety usually called “kudozukuri”, is centered at the Tsukushi Plain in the North Kyushu District. It is called “U” because it has two projections in the rear.

The L. type roof, another variety with one projection in the rear of the house, is found in Kyushu (“kagiya”), in the Kochi Plain (“magariya”), and on the Tamba Plateau (“tsunoya”). Old families often adopt this roof-type.

The “futamunezukuri” roof, where the main body of house and the kitchen are separated, is found in Kagoshima down to Nansei Islands. This roof-type is originated in the Micronesian and the Melanesian Islands.

The conical roof is found in Okinoerabu and Yoron, the islands situated at the southernmost tip of Japan.

iv) As shown here, roofs in Western Japan richly vary in type. They are further varied by the use of different ridge pressings (decorative). The distribution of these roof-types remarkably correspond with distinctive areas. It further coincide with topographical districts.

The mixture of two or more types as well as the transformation of a type is seen where two distributional areas meet. Social changes have at places resulted in changes of roof-type. Adaptation to climatic conditions has also contributed to improving the roof. At defiles and mountain passes, the course of circulation of each roof-type can be traced.